

おひとりさまによる公園の利用状況に関する研究

A Study of the Usage situation of park by one person

This research aims to clarify the actual situation of the use the park by one person and propose a new way of park. Through the analysis, the following became clear. 1) The whereabouts of one person depends on whether they can select ways of sittings by themselves and their eyes meet to other's. 2) A one person tends to gather in a place where another one person has been stayed.

○谷澤柚香¹, 山中新太郎²

*Yuka Tanizawa¹, Shintaro Yamanaka²

1. 序章

1-1. 研究背景

近年、少子高齢化の影響で公園の利用者形態は変化を遂げている。

国土交通省都市局公園緑地・景観課が発表している、平成 26 年度都市公園利用実態調査¹⁾では年々一人で訪れる公園利用者が増加傾向にあることがわかっている。本論ではこの一人利用者を「おひとりさま」と称する。

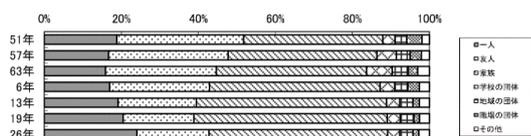


図 1 公園利用者のグループ構成の経年変化

出典：国土交通省都市局公園緑地・景観課：
平成 26 年度都市公園利用実態調査 P. 45 より

1-2. 「おひとりさま」とは

2000 年代以降、「おひとりさま」という言葉が、主に 30~40 代の单身女性および単身高齢者を指す言葉として浸透するようになった。前者は晩婚・非婚化、後者は高齢化を背景にしているが、单身者の増加という点は共通している²⁾。

单身者の増加は、引きこもり、孤独死、無縁社会などのネガティブなイメージに受け取られがちだが、それに対して、「おひとりさま」という言葉は、自閉、孤立、孤独ではなく、自立した個人として、ひとりである状態をポジティブに表している²⁾。

1-3. 研究の目的

本研究では、街区公園を利用する「おひとりさま」の利用状況を調査することで、都市公園における「おひとりさま」による新しい公園利用の実態を明らかにし、新たな都市公園の在り方を提案することを目的とする。

1-4. 既往研究と本研究の位置づけ

公共空間における人の居場所選択の研究としては松田³⁾は人がある場所に位置した際、一時的に占有したと他者から見なされる空間的広がりやを「占有領域」と呼んだ。人の立つ位置と身体の向きによって占有領域が変化し、他者が既にいる状況ではある空間の広がりやが他者の占有領域として知覚され、居場所選択に影響を与えると述べている。

こうした研究成果を踏まえて本研究では、おひとりさまの居場所選択を都市公園で分析することにより、新たな公園利用の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象と研究方法

2-1. 研究対象

自然、遊具、保育園、ステージなどの様々な環境的な要素を持つ千代田区の錦華公園を対象に調査を行う。

錦華公園内のベンチのある場所を、広場の中心から少し距離があり、60 cmほどレベルの高い「ステージゾーン」、広場の中心と通行人からの距離が最も近く、子供用の遊具の目の前に位置する「遊具ゾーン」、自然が多く一人用のベンチも用意されている「緑地ゾーン」の 3 つにゾーニングし (図 2)、環境的要因によるベンチの埋まり方について調査する。

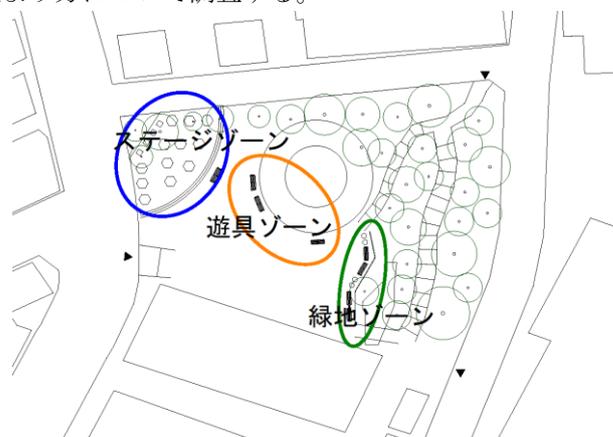


図 2 ゾーニング図

2-2. 調査方法

カメラによる写真撮影と肉眼による観測調査を平日 12:30~14:30 の 15 分毎に撮影を行い「おひとりさま」のベンチの座り方について向きや姿勢をプロットする。

これにより、「おひとりさま」の居場所選択の要因を明らかにし「おひとりさま」の居方を調査する。

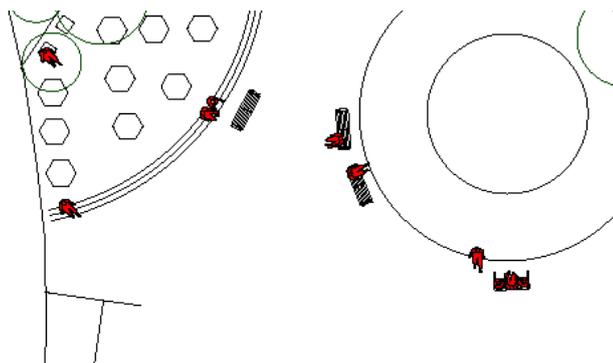


図 3 プロット図の例

3. 調査結果

調査により、「おひとりさま」がよく利用する場所は「緑地ゾーン」、「ステージゾーン」、「遊具ゾーン」の順であった。

また、「おひとりさま」の座り方には大きく 3 つのパターンが見られた。3 つの座り方について図 3 に示す。

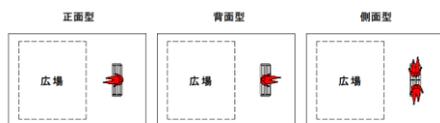


図 4 座り方の類型図

「自然ゾーン」では「正面型」、「背面型」、「側面型」の 3 タイプの座り方がみられたのに対して、「ステージゾーン」ではベンチの後ろが狭くなっているためか「正面型」「側面型」の 2 タイプのみがみられた。「遊具ゾーン」では「正面型」が多数で「背面型」が 1 人、「側面型」はみられなかった。

このことから、「おひとりさま」の居場所選択として、自分自身で座り方を選べるかどうかという要因もかかわってくるのではないかと感じた。

13 時半に隣接する幼稚園の園児たちの帰宅時間になると結果は大きく変わり、「緑地ゾーン」、「遊具ゾー

ン」からは「おひとりさま」が居なくなったのに対し、「ステージゾーン」には「おひとりさま」が少数ではあったが残った。

実際に園児が居る状態でベンチに座ってみると、「緑地ゾーン」と「遊具ゾーン」では園児たちの視線の高さと着座した自分自身の視線の高さが同じレベルであったが、60 cm ほど地面レベルのあがった「ステージゾーン」には園児が登ってくることはなく、視線が交わることはなかった。

また、環境的要因とは別に、既に「おひとりさま」が居た場所には同じように「おひとりさま」が集まりやすく、二人組の先着者が居るとおひとりさまが集まりにくい傾向がみられた。

4. まとめと展望

調査に先立って、公園のベンチの埋まり方は、「緑地ゾーン」、「ステージゾーン」、「遊具ゾーン」の順ではないかと予想していたが、調査結果は仮説通りとなった。

また、「おひとりさま」の居場所選択の要因としては、自然などの環境的要因の他に、「自分で座り方を選択できるかどうか」や視線のレベルなどが関係しているのではないかと考えられ、これらの要素がこれからの公園づくりの新たな指標になるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 国土交通省都市局公園緑地・景観課：平成 26 年度都市公園利用実態調査
- 2) 大橋寿美子, 篠原聡子, 南後由和, 星野雄, 宮原真美子：日本のおひとりさま空間, 建築雑誌, 日本建築学会, 第 130 集, 第 1666 号, p. 04, 2015 年 1 月
- 3) 松田好晴：公共空間における他者の占有領域の知覚に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 519 号, 93-99, 1999 年 5 月